
烈風の騎士姫の娘

ふろむのう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烈風の騎士姫の娘

【Nコード】

N3344BA

【作者名】

ふろむのう

【あらすじ】

烈風の騎士姫の娘として生まれたルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
ルイズが”男装”した状態で物語が始まったとしたら？

ヤマグチノボル様が著作した、「ゼロの使い魔」のインスパイア作品、「烈風の騎士姫」が好きだったのでつい。

第1話

ルイ・アレクサンドル・デュ・ダートリチエ。”トリステイン魔法学院”に在籍する、この春二年生になったばかりの秀麗な少年である。

しかしながら、彼は事実隠された姿を持つ。

本名、”ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール”。”トリステイン”きつての大貴族の家、”ヴァリエール家”の三女なのだ。

なぜ、彼女が魔法学院で”男装”なぞしているのか？ 時は過去に遡る。

この”ハルケギニア”という世界では、貴族と平民が存在しており、さらにそこには明確な違いが同様に存在している。

貴族は”魔法”が扱えるのだ。そのせいもあってか、彼らの間には階級の差並びに貧富の差が存在しており、同時にそれから来る確執も存在している。

そして、貴族が不自由なく魔法を扱えるという不変の事実は覆されるべきではない認識だった。彼女を除いては。

そう、彼女は魔法が扱えない。”属性魔法”も”コモンマジック”でさえも。

属性魔法はそれぞれの先祖由来の系統別の魔法で、火・風・水・地の4属性が存在している。その上、系統に左右されることのない初歩中の初歩であるコモンマジック、魔法を扱うものならば必需の魔法がこの世界にはある。

例外中の例外である彼女が貴族の世界ではどれだけ異端なのか、容易に想像出来るであろう。当たり前前（あたりまえ）のことが当たり前前（あたりまえ）に出来ない彼女は生まれながらにして、途方もない逆境を抱えてしまっていたのだ。

意図せずして、自らが落ちこぼれであることを知ってしまった彼

女がどれほど自分自身にどれほど失望しただろう。父親も母親も、そして一番目の姉も二番目の姉も、自分自身の目の前で自由に制限無く魔法を扱っている姿を見てきている。貴族同士の舞踏会で親に付き従った際も、幼馴染と遊んでいる時も、貴族は当たり前前に魔法を扱えて、けれども平民は魔法を扱えない。

自分は貴族なのだから、当然当たり前のように魔法を使うものだと思っていたのだ。

幾度も幾度も魔法の発動を行おうとするも、呪文が導きだすはずの結果を導けない。魔法の杖で練習していると家族は、まだ始めたばかりだから、まだ慣れていないから、少しやり方が違うから、修行が足りないから、真面目にやっていないから、と少しずつ意見変えていく。

事実、家族からすれば、ルイズがなぜ魔法を扱えないのかが分からないので、何を伝えたら良いのか分からなかったのだ。ルイズへと伝える内容も度々変化してしまうのも当然だった。

しかし、一体何が真実なのか、彼女にはもはや分からなくなっていた。

私は一体どうすればいいの、やり方が間違っているの、修行が足りないの、まりよくの扱い方がちがうの、わたしが、だめなの？

彼女はそう思い始めていた。

貴族にとって常識の、当たり前前のことが出来ないことで自分自身を喪失しかけているルイズに見かねた両親が、彼ら自身が過去に会得した武術を教えていくこと決める。魔法ではない他のことで自信を得れば、彼女にとっていい方向に進むに違いないはずだからだ。

実際は魔法を含めた”杖術”だったのだが、当然ルイズには意味がない。そこで、剣術を教えることになった。最初は嫌々ながらも両親の言うことに渋々従い、鍛錬を開始したルイズ。そしてみるみる上達していく様で両親たちを驚かせた。

ルイズは魔法のこと”以外”に関しては多才で、かつ、努力を惜しまない少女だったのだ。

けれども、ルイズはそんなことはどうでもよかった。

”魔法が使えない”それだけが彼女を苦しめる。

もし平民だったらならば、魔法が使えないことなんて常識で、そんなことで悩む貴族を笑い、いい鬱憤の発散だとばかりに罵倒するだろう。

だが、ルイズにとっては魔法が使えることは貴族としての彼女の自己同一性であり、同時に確かな家族同士の絆だった。

剣術を両親や指南役から教わることに、魔法を使えない自分が浮き彫りになっていく。良かれと思ったはずの親切心が彼女にとっては仇となってしまうのだ。剣術の腕が上達していくたびに、家族とのすれ違いが増えていく。ますます家族は混乱していくばかりだった。

一方でルイズは孤独感が増していく。

なんで魔法が使えないの、なんで？ どうして？ どうして？

…はは、使えない、わたし。

彼女はなんとなく、もはや自分が周囲の家族や貴族と同じように魔法を扱えないのだと理解してしまった。家族と顔を合わせるのがどんどん辛くなっていく。

彼女はいやなことがあると良く庭の池にある小舟に隠れる習慣があった。自分だけの秘密の場所。しかし、そこが実家である以上、自分たちの子供で、妹である以上、家族がその習慣を知らないはずが無かった。

自己嫌悪しながら泣いている時、年上の幼馴染が小舟の上で布にくるまる自分を見つけた。普段見られることない姿を見られた彼女はつい恥ずかしくなってしまう、飛び起きて逃げ出した。

待ってくれ、ルイズ。小さいルイズ。どうして君は泣いているんだい？

ベベべつに、わ、ワルド様にはかかんけないな、ないじゃない。関係ないだって？　ぼくは、かわいいルイズ、君の幼馴染じゃないか。双月にも勝る君の瞳が濡れている理由を教えてくださいないかい？　いいから、はははなしてよ！　わたしをほうっておいて！

そうルイズは幼馴染の彼に言い放ち、握られた手を振りほどいて逃げていく。幼馴染の彼も内心何故彼女が泣いているのかを知っていたものの、彼女の力になりたいがためにあえてルイズに問いかけたのだったが、彼女を思っただけ強く握らなかったその彼の手が元となり逃げられてしまったのだった。

もうあの小舟はだめね、きつとさっきの大声で私がどこにいるのかみんなに知られてしまったわ。

そう思い、自分にとっての憩いの場が失われたことを悲しむ。あの池の小舟は誰の目からも私を捉えない、重圧から逃れるための場所だったのだ。

ただ別にその時誰も、家族でさえも使用人でさえも、彼女に圧迫感を与えている人物はいなかった。

しかし、彼女のために厳しく接することで、より明確に彼女の劣等感が刺激されてしまう。

すべてが、彼女の周りの世界すべてが、彼女にとっては恐怖の存在だった。父親の大声が怖い、母親の視線が怖い、姉のいじわるが怖い、姉の優しさが怖い。そして、何もかもが怖い。

彼女は日常的に情緒不安定になりがちだった。彼女を思う行動の全てが逆効果となりルイズと家族の距離を遠ざけていく。

そして彼らの間を決定的に遠ざけてしまった出来事とは、魔法学院入学の話がルイズになされた時のことだ。

ルイズ？ 聞いているのルイズ？

はははははいっ！ お母様！ 聞いております！

夕餉の最中に繰り出された突拍子もない母親の発言に、一瞬呆けてしまっていたルイズ。

彼女は思った。

なんでお母様は「魔法学院へ行け」なんておっしゃるのかしら。
私がそんなところに行ったってどうせ、意味がないのに。

今の彼女は魔法そのものの存在を無視したいほどにまで毛嫌いしていた。

私と同じ年代の子たちがたくさんいるトリスティン魔法学院に行くなんて、考えたくも無い！ 自分は一応貴族の一員だ。私のような落ちこぼれが貴族の子息子女だらけの所に行くなんて、どんな風に扱われるのかたやすく想像がつく。きっと私がバカにされることでヴァリエール家の名にも迷惑をかけてしまうはずだわ。

そうやって自分自身を卑下することに慣れてしまっていた彼女ではあったが、別に貴族としての誇りを捨てていた訳ではない。恐らくそれを捨ててしまったが最後、よりもっとヴァリエール家の面汚しとして有名になることが可能だ。さすがに家族に迷惑をかけることは絶対にしたくない。

いやで、

行きなさい。

…はい。

食事中勢いよく立ち上がった彼女だったが、即座に鋭い一声が返ってくる。無礼なマナーを指摘されながら、おとなしく座るルイズ。そして食事が終わったら寝室に來なさい、と言われるのだった。

家族同士で長い時間をかけて話し合われたルイズの魔法学校行き。話し始めた当初は行くべきでない考えが中心で、嫁入りを考えてもいいのではないかという路線もあった。

しかしながら、最近のルイズはどうも魔法の実技や勉強を真面目にやっていないように見受けられるし、どうも覇氣がない。一人での生活をさせて同年代から刺激を受けてみるのもいい経験なのではないかと、魔法学院行きが決まったのだった。

そして、ルイズのこれからを一変させる重大な一言が寝室に入っただけの彼女に母親から告げられた。

「男装しなさい。」

なんで私はここにいるんだろう、なんで男装なんてしてるんだろう、なんで偽名なんて使ってるんだろう、なんで使い魔なんか召還しないといけないんだろう、そう周りには聞こえない小さな呟きをするルイズ。魔法学院に來てからというもの、無意識的に独り言が増えてしまっていた彼女。一人だけの生活空間が与えられたという

せいもあるかもしれないが、一番の原因は鬱屈した彼女の心が原因に違いない。

入学してからの出来事もその鬱積を加速させたことに一役かっているのだろう。

桃色のブロンドの長い髪、鳶色のくりくりとした双眸、透き通るような白い肌をした彼女は愛くるしくて、可愛らしくて、可憐で、あどけなくて、あらゆる賛辞の言葉を受ける権利がある見目麗しい美少女だった。男装した彼女は、彼女自身が持つ本来の女性らしさ、少女らしさを醸し出しながらも、男性用の服装を着ている。一見しただけでは身長の高さも男子なのか、女なのか周りには全く検討もつかない。

しかしながら、男性用の服を着ていることと、力強い視線が男性的な風格を作り出す。図らずも中性的な魅力を持った彼女は一躍魔法学院で有名になった。

けれども彼女はそんなことを全く望んではない。もちろん男性からの誘いも女性からの誘いも、全く応えようとしない。誘いにも問いかけにも応えない、つれない彼女はそのうち、やっかみが舞い込んでいくようになる。

さらに彼女自身が魔法を使えないことが魔法学院での孤立をより一層高めた。

ひとたび彼女が杖を振れば、あらゆる魔法がキャンセルされ、爆発を引き起こし、集中して捻り出されたその多量の魔力は周囲に大きな被害を引き起こす。

当然彼女にからかいの声が上げられる。

「おい、ルイ！ もうお前授業で魔法を使うな！」

「どーせお前はいつも失敗するんだ！ 君にはなんの祝福も与えられなかったんだよ！」

「この”ゼロ”のルイ！」

彼女に与えられた不名誉な称号、それが”ゼロ”だった。ドットにも、ラインにも、トライアングルにも、スクエアにも。1にも2にも3にも4にもなれない、ゼロのルイ。

属性魔法を扱うときに、ある一つの属性に、さらなる属性を加えられるようになることで、メイジとしての格があがっていくこの世界では、なんの属性も扱えないルイズの称号として、的を射ていた。

「うるさい！ 失敗しただけだ！ 次こそ！」

「次？！ 次って言ったのか君は！ ははは！ きいたか、おい！」
「ああ、きいたさ！ そう言って成功した試しはないのにな！ あははは！」

使い魔召還の魔法が”失敗”し、誹謗中傷の声と嘲笑の笑い声が生徒たちに広がっていく。

いつもこうだ。魔法の実技なんて大嫌い。学科だけなら私はいつだって、上の学年にだって国の研究機関の”アカデミー”にだって負けないのに。

彼女は齒をかみ締め、涙ぐみ、声を震わせながらそう思った。

使い魔召還の儀はトリステイン魔法学院の広大な庭で行われている。青い空、白い雲、緑の芝生。とてもきれいなところだ。有象無象がいなければ。

すでに周りにはそれに成功した生徒たちと彼らの使い魔が数多く並んでいる。馬っぱいの、鳥っぱいの、蛇っぱいの、竜っぱいの、鼠っぱいの、蛙っぱいの、犬っぱいの。一匹の使い魔が暴れたしたら、途端に弱肉強食の世界が繰り広げられそうな光景だが、使い魔たちは主人である魔法使いに忠実なため、そんな心配は無用だ。

そしてその中でただ一人、ただ一人ルイズだけが使い魔を召還できていない。そもそも召還の魔法が発動しない。これで成功出来なかったら、もしかしたら一年生をもう一度繰り返すことになるかもしれない。

そのような惨めな思いをするのだけは絶対にイヤだった。今まで散々な思いをしてきたのに、それを繰り返すなんて、想像しただけで彼女は怖かった。

落ち着くのよ、わたし。今まで失敗ばかりだったかもしれないけれど、使い魔召還の魔法はまだ六回しか失敗してないわ。まだ可能性はあるのよ！

ゼロだと罵られ、からかわれ、時には誇りや自尊心を抉ることもあった。それでも、彼女は一度も生徒同士の争いを起こしたことはなかった。

それは一体なんのためなのか、家族のためなのか、自分のためなのか、全く分からなかったが、挑発に乗って一時の気の迷いで台無しすることだけはしたくなかった。台無しにされるものがなんなのか、何を指しているのかは分からなかったが、とにかくそうするべきだと自然に思っていた。

「さあ、ミスタ。もう一度やってみましょう。そろそろ時間が押していますので、今日のところはこれが最後です。」

「は、はい。わかりました、ミスタ・コルベール。」

目を閉じて深呼吸をしていた彼女に、少々髪が少ない頭の、彼の身長に近い杖を持った眼鏡の男性が促した。

あの言い方だとまだ猶予はあるみたいね、そうよ、もし次が失敗しても、まだたったの七回よ、それくらいじゃ失敗したなんて言えないわ。

そう貴族たちの常識からすれば若干狂った思考になりつつある彼女。それが彼女にとっての悲しい現実だった。

「（我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。）五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、使い魔を召還せよ！」

さすがに自分自身の名前を呪文詠唱の際に誤魔化すことは出来な
いため、周りに聞こえないように、小さくそして素早く自分の名前
を詠唱に組み込む。

詠唱が完了したと同時に瞑っていた目を開き、頭に近づけていた
杖の先を何もない目の前虚空へと勢いよく振るように突き出した。
彼女の練りこまれた魔力が”蠢く”。空間の揺らぎが肉眼で確認
出来るほど、高い出力で放出された魔力。もしこれが失敗し爆発し
てしまったら、今までの比ではない破壊力が生み出されるかもしれ
ない。そう危惧した黒いローブを着ている教師のコルベールは爆発
に備える。

しかし、その心配は不要となるだろう。

「ル、ルイが魔法を成功させたぞ！」

「そんな、うそよ！」

「気をつける！ 何が起きるか分からないぞ！」

「なんだと！ これを見る！ ちゃんとした”サモン・サーヴァン
ト”のゲートじゃないか！」

内心初めて成功した魔法に打ち震えながら、生徒たちの無礼な反
応に言葉を返す。この授業が始まってからというもの、次々と成功
させていく生徒たちを妬みながら目を向けていた。どうせ、自分は
また爆発が起きて終わりなのだと、からかわれて終わりなのだと諦
めていた。しかしながら彼女は、彼女以外の生徒が成功させたサモ
ン・サーヴァントと同じ現象を、結果を引き寄せることが出来たの
だ！

ざわめきながら警戒する周囲をよそに、事実、彼女は周りのこと
なんてどうでもよくなっていた。
ゆらゆらと固定の形を持たず、断続的に楕円球の”ゲート”が歪
む。

やがて、その使い魔の姿（・・・・・・・・・・）が現れた

なんでこうなるの、なんでわたしばかりこんなめにあうの。

授業が終了した後に、”フライ”を使用して空を飛び、教室に戻る一団を恨めしい眼差しで見送った。そして、のっぴきならない事情によりその気絶している使い魔（・・・・・・・・・・）を引きずって魔法学院に併設されている男子寮の自分の部屋へと連れ帰り、雑に部屋の床へと投げ入れた。彼女は少女であったものの、幼少の頃から行っている剣術のおかげで、それ相応の力がある。なので、その”イキモノ”を引きずるなど造作も無かった。

その”のっぴきならない”事情を簡単に説明すると、気に食わなかった、彼女にとって前述の一言に尽きるようだ。

だって前例がない。このイキモノを”実際”に使い魔にしているなんて聞いたことがない。聞いたことがあるのは、ハルケギニアに存在しているイキモノ、それも動物や幻獣、特異な能力を持ったイキモノが召還されたことばかり。実際、彼女と同じ同級生たちはそういうイキモノを召還して従えていた。

彼女のような使い魔が召還された”例外”なんて耳にしたことがない。

ミスタ・コルベール、先ほどの授業の担当者にも、もう一度召還

の魔法を使わせてくれと頼んだものの、聞き入れてくれなかった。伝統的であり、神聖な儀式である使い魔召還の儀のやり直しなど、認められないと言われてしまった。

彼女は学科の成績は非常に優秀なものの、実技における成績はまさに”ゼロ”だったので、これ以上駄々をこねると留年しかねないそう判断した彼女は混乱している様子のイキモノの隙を見て、腰に携えていた両親からの贈り物である剣を鞘ごと振りかぶり、気絶させた。

突然の暴挙ぶりに、生徒たちがルイが狂ったと騒ぎ立てたものの、苛々の絶頂にいた彼女の瞳の圧力が、辺りを睥睨したと同時に彼らを完全に萎縮させた。

ミスタ・コルベール、使い魔が気絶しちゃった。これは介抱が必要ですよ？

えっ、ああ、確かに、そうですね、ミスタ。

なので、僕は自分の部屋に帰ろうと思います。いいですよ？
わ、わかりました。

普通なら教師を威圧するなど、あまりに無礼な態度ではあったが、尋常じゃない様子の彼女にコルベールも混乱したのか、つい頷いてしまう。頷いてしまったからには、それを否定するのも気が引ける、真面目な教師である彼はそのまま春の使い魔召還の儀の一環で行われていた授業を一度終了するために、教え子と共にフライで教室へと飛んでいったのだった。

放り出した使い魔を横目にしながらベッドをへと飛び込む。彼女は魔法学院に来てからというものの自分の部屋へと帰ると同時に、天蓋付きの明らかに男物ではないその自分のベッドに毎日のように飛び込み、唸っていた。

「うああああああ、なんでなんでなんで！！」

手を振り足を振り、朝起きた時に自分自身で整えたシーツがぐちゃぐちゃになる。魔法が使えない、男装している、この二点の足枷は彼女の出来る行動を大幅に制限している。魔法が使えないから、日常的に用いるコモンマジックの代わりに、魔法が付与された高価な”マジックアイテム”を用意しなければならない。フライが使えないから、移動だって全てが徒歩や馬だ。

その上、男装しているから、メイドや召使いを呼びつけて日常の世話をさせることも出来ない。洗濯だって、掃除だって、着替えだってなんでも自分でしなければならない。実家にいたときはメイドに任せつきりだった家事の類の全てを、魔法学院に通うことが決定してから、母親にみっちり躾けられた。

本当の意味で彼女は、完全に一人暮らしをしていたのだ。

もはや習慣となつてしている彼女の情緒不安定ぶりは生徒が引く程である。よく彼女は小さな声でわだかまりのある内心を呟いたり、自分を勇気づけるための独り言を呟いている。本人はそれが周囲に聞こえているとは夢にも思っていない。

ルイがいきなり態度を豹変させたり、呟き始めたら近づかない、それが学院内での鉄則だった。

彼女の部屋は、通うことが決定した後に母親が指定の部屋を事前の下見して、男装がばれないにはどのようにすればよいのか、事細かに計画を練り上げられた上で用意されている。常に音を断絶する”サイレント”が部屋を沿うようにかけられており、いくら騒ごうが声が漏れることがない。部屋の鍵だって特別製で、施錠を扱う魔法である”ロック”や”アンロック”が効かないマジックアイテムだ。物理的に鍵を用いる以外にこの部屋の扉を開ける方法は存在していない。備え付けられている窓も同様にだ。

音が反響することがない、若干気持ち悪いとルイズが思っているこの部屋に静寂が訪れる。どうやら彼女は一通りうなったり、さげんだり、じたばたしたりしたおかげで満足したようだ。

とりあえず心の平静を得ることが出来た彼女は、ベッドをよろよると降りて、それから窓へと歩み寄り、のろのろと最後に窓のカーテンを閉めた。

男装がバレたら花嫁修業をしなさいと母親から脅されているものの、部屋にいるときぐらひは男装を解きたいルイズ。窓カーテンが開けられるのは男装している時のみで、それが閉じられているのが普通だ。

そして、なぜ、カーテンが閉められたのか。それはこれから行わなければならない使い魔との”契約”の儀に関連している。

はあっ……。なななななで、わたしがこここここんなことを自分からしないといけないのかしら。よよよよよりにもよって、こっこここんな、こっこんなわけのわからないイキモノなんかに！
どこのどいつが契約のやり方をこんなふうにしたのよ！

いくら文句があろうと、引き起こされた結果を巻き戻すことなど出来ない。召還された使い魔は、呪文のとおり、正しく運命だった。彼女はさきほど、問答無用に勝手に出てきたイキモノを気絶させ、部屋に帰ってきただけ。それは、召還された使い魔ならば行わなければならない”コントラクト・サーヴァント”を行っていない意味する。

ふうふうと息を吐きながら心を再び落ち着かせ、それから眼を瞑り、唱えなければならぬ呪文を心に浮かべる。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ。」

使い魔を見下ろすと、荒く引きずったのにも関わらず未だ暢気に気絶したままだ。彼女は相当深くそのイキモノを夢の世界へと落と

したらしい。

自らの頭に向けていた杖をイキモノへと向ける。

わたし、したことはないのに。

柔らかで薄紅色をした唇をもう片方の手の指でなぞり、そう少しだけ頬を染めながら呟いた彼女は、まさしく相応の少女だった。

そして彼女は打ち捨てられていた使い魔にさらに近づいて床の膝をつき、そのハルケギニアには恐らく存在していない異国風の衣服を身にまとった”少年”にキスをした。

ルイズの部屋で眼を覚ました、平賀才人は訳が分からなかった。
なにもかもが。

彼は秋葉原へ修理に出していたノートパソコンを上機嫌で受け取って、出会い系サイトに登録したばかりのわくわくとした刺激のある高揚感で街を歩いていた時に、突然現れた楕円球の不思議な物体を見つけた。

余りに不自然な物理現象を発見した彼は、一瞬混乱して周りを見回す。しかし、誰も気づいた様子はなく、そしてまた才人の不自然な動きにも気づいた様子はない。

自らの眼の錯覚を疑ったものの、依然としてその物体は変わらず鎮座している。

別にここでも何もなかったかのようにソレを無視することも出来た。しかし、若さゆえの好奇心がソレへと触れてみたい欲求を掻き立てる。

彼のその行動が全ての始まりとなる。

どんな感触がするの？ やわらかいのか？ はたまた逆なのか。近づいて注視してみたものの、今までの人生の中の経験上で浮かび上がるものはない。

ノートパソコンを左手で腰に抱え、右手を伸ばしてそれに触れた途端、彼はその”ゲート”へと吸い込まれていった。

瞬刻の暗闇が即座に過ぎ去ったと思えば、なぜか自分は少しの全身の痛みと共に背中を地面にしていた。腕の感覚からノートパソコンはお腹にある。

空が青い、こんなに晴れてたっけ。

さきほどまで視界に入っていた空の景色の違いに戸惑いながら身体を起こしたその時、彼は啞然とした。

やばい、なんかすごいところにいる。

それもそのはず、彼は見たこともない動物らしき生き物に加え、黒いロープやマントを羽織った怪しい集団に囲まれていた。首を回して状況を確認するも、一体全体何が起きたのか分からない。

そして、集団から離れ、自分の目の前にいる桃色の長い髪を馬のように結っている人間が、これまた怪しい格好をした中年の男性となにやら話し込んでいる姿をようやく認識できた。

案外人間動揺すると、目の前に何があるのかすら理解しないんだな、と才人は思った。

すっげーかわいい。

思わず彼はそう口にした。

彼がもし彼女の本当の性別をその場で見抜いていたのなら、それは真実として受け止められることだろう。しかしながら、今の彼女の性別はあくまで”男”だった。

どうやら揉めている、とまでは判断出来るものの、何を喋っているのかが分からない。少しだけ耳鳴りがする、なんの受身もとらずに転んでしまったせいだろうか。

むしろ、それよりもここはどこなのか、全く検討がつかない。少なくとも周りにいるような生き物はいなかったはずだし、通りを歩いていた人たちだってこんなガイジンさんじゃなかった。

彼は、お前らは誰なんだ、そのたった一言すら喋れることもないまま、意識を失った。

ルイズに剣の鞘でぶん殴られたせいだった。

そして、このルイズの部屋で彼が眼を覚ました原因、それは左手の異常を、睡眠状態にあった脳が覚醒するほどの激しい異変を感じ取ったからだった。

「あっちいいいいい！ あぐああああああ！」

今まで感じたことのない熱さと痛みに思わず叫び声を上げた才人。涙が出てくるほど痛い。ついでになんか頭も痛い。

本当にわけがわからなかった。

「はあはあ…。」

右手で、痛みを感じ取っていた左手の甲を無意識に抑えていたものの、ぜんぜん痛みが引かない。

それが無くなったとき、両手と膝を床についていた。

「なんだ…、これ？」

どんなことがあればあれほどの激痛を引き出せるのか、左手を見るのが怖かった才人だが、薄目で左手の甲を見たところ、なにやら文字らしきものが書いてある。

「使い魔のルーンだ。」

「はえ？」

声がした方向へと顔を向けるとさっきの美人がいた。

才人は状況を把握することに精一杯だったので気づくことは出来なかったものの、さっきの美人、ルイズは顔を真っ赤にしながら、腕を組んで眼を合わせようとせず、才人に応えたのだった。

口調を直していないところから鑑みるに、たぶん男装のことを話すのは気が引けている様子。自らの使い魔になった才人だったものの、彼は人間で、まだ信用できない。どこから情報が漏れるか分かったものではないので、ルイズは秘密にすることを決めたのだろう。魔法学院で彼女が味方に出来る人物など、誰もいない。

「使い魔のルーンって、何すか？」

「はあ？ 使い魔のルーンは使い魔のルーンだ。そんなことも分からないのか？」

これだから平民は、と赤みが引かない顔をしながら口籠る。

バカにしたような態度に少しだけカチンと来た才人だったが、ここで怒らせても何も始まらない。ひたすら下手に出る作戦を決める。

「ええと、はい、わかんないっす。」

「僕は貴族だ。魔法使いである貴族は、下僕として使い魔を召還する儀式を行うことがある。それに平民であるお前が呼ばれ、この僕に召還された、ということだ。」

貴族？ 魔法使い？ 平民？ 召還？

訳の分からない単語の羅列をぱつと出され、判断に苦しむ才人。最初は少し頭がちよつとヤバめの人なのかな、と思ったがそれを口にしては怒りを買うだけ。

「その、この文字はなんですか？」

「これは…、僕もちよつとどんな意味なのか見たことがないので分からないが…、使い魔のルーンだ。」

左手の甲を、見やすいように才人は向ける。

かわいい女の子に手の甲を両手で握られて才人は少しドキつとした。

ルイズはまじまじと才人の手にあるルーンを見て、該当しそうなものを頭の中で検索するが、どうにも分からない。

「後で、調べておく。」

「…そうっすか。って使い魔のルーン？」

「そうだ。」

「俺、使い魔？」

「何を言っているんだ。当たり前だろう。」

「はあああああ？！ 使い魔あああああ？！」

「ついきなり叫ぶな！ うるさい！」

「んだと！？ 何そんな、勝手に訳のわからないものにしてくれやがったんだ！ それにタトウーなんて彫りやがって！」

若干、両親のせいで大きな声にトラウマがあるルイズは身を竦ま

せる。なぜだか怖くて自然に眼が潤む。

「たとうー？ 何だそれは？ 使い魔のルーンだって言っただろ！」
「だから、それをなんで俺に！ ぜってー認めねーけど、断りぐらい普通入れるだろ！」

「はあ！？ 僕に召還されたんだから、この僕はお前のご主人様だ！ 伺いを立てる必要なんてない！」

「さっきから召還召還って一体なんのことを言ってるんだ！ 早く俺を元の場所に返せ！」

才人は魔法なんてものを未だに眼にしたことがないので、ここが日本ではなく、ハルケギニアという別の世界だと気づくことができない。

あたかも、自分があの怪しい集団に車か何かを用い、さらに眠らされて連れ去られたのではないかと本気で思っている。

しかし、才人にとっては怪しい集団でも、こちらの世界にとってはただの貴族の子息子女の集団だ。

「くっそ、一体なんなんだ…。そうだ、俺のパソコンどこいった！ 返せよ！」

「ばそこん？ なにそれ。」

「ノートパソコンだよ！ ラップトップ！」

「お前が何を言っているのかさっぱり分らない。」

「パソコンもしらねーのか！？ どんな世間知らずだよ、お前は！」

「何だと？！ 僕をバカにするな！ お前の方が頭がおかしいんじゃないか！ さっきから訳の分らないことばかり言ってる！」

「はあああ？！ それはこっちのセリフだ！ 今時、パソコン知らない奴なんている訳ねーだろーが！」

売り言葉に買い言葉、お互い息を荒げながら互いが違う世界の人

間である以上終わりの見えない口論が続く。

ルイズは言葉の通り、才人のことが訳が分からなかったが、今の状況も訳が分からなかった。

恐らく前例のないであろう人間の使い魔を召還し、ファーストキスまでその使い魔に奪われ、その彼に意味不明なことで怒鳴られまくる始末。

「知らないもんは知らないって言ってるだろ！ ……はあ、やっぱり召還のとき何か失敗したんだ。」

「なんだ、もつとはつきり言ってくれ！ ぼそぼそ喋ってんじゃねーよ！」

「うるさい！」

ルイズは両手を突き出して、才人の胸を押す。軽くよろけた才人だったが、別に転ぶほど強く押された訳ではない。

「ってーな！ なにしやがる…、ってあれ」

押された衝撃で頭が揺れ、一瞬眼が眩んだ才人。その後即座にピンク髪に眼を向ける。

「な、なに泣いてるんですか。」

「泣いてない！」

「いや、どうみても、『泣いてない！』…はい。泣いてないです。」

しまった、女の子相手にちょっと強く言い過ぎたかな。と、自称紳士のつもりである才人は反省する。

積みもりに積みもったストレスが、ルイズの心をいっぱいにしてしまっていた。

なによなによなによ、なんなのよ、怒鳴りたいのはこつちよ。平民が使い魔だし、いきなり訳のわかんないこと言い出すし、大きい声出すし、怖いし、べべ別に怖くないけど、使い魔みたいな犬ごときが、吠えないでよね。

ぐちゃぐちゃの心が抑えきれずに表へと這い出ていく。言葉で心の内の表現するのはルイズが一番苦手としてのことだ。そして、代わりに別のものが出て行ってしまう。

少しだけ俯いて、顔赤くし、両手をぎゅっと握っているルイズに、今までとは違った柔らかな雰囲気有才人は言葉をかける。

「悪かったよ、だから、ええと、その、なっ？」

「べべべつに、ななな泣いてないって言ってるでしょ？」

「ああ、そうだった、うん。」

「わ、分かればいい。」

あんまり素で泣いているところを見られたことがないルイズはうるたえて、口調が元に戻るものの、彼女のプライドを尊重する才人の気遣いが、それを忘れさせた。

「そうだ。」

「こ、今度は何？」

「名前だよ名前、お前なんて名前なんだ？」

「お前なんて、失礼な平民だな。」

「そう呼ばれたくないなら名乗ってくれよ。…俺は、平賀、才人だ。」

「ヒラガ、サイト？」

「そう、平賀才人。あ、いや、どうだろ、名前は才人のほうだ。」

目の前にいるこの子も、さっきの広場にいた奴らも明らかに日本

人ではない。だから恐らくファーストネームを最初に言うべきだと才人は思った。

「じゃあ、サイト・ヒラガだな。」

「おう。サイトって呼んでくれ。」

「最初からそう言え。分かりづらい。」

「俺の国ではそういう順番なんだよ。」

「サイトの国？」

「そう、日本。」

「二ホン？ …聞いたことがない。」

何言っただコイツ？ もし本当に誘拐でもされていたのならば、ここが日本じゃない可能性もある。なので、姓名の順番言い直したのに。その上、この子は外国人にしか見えない。

しかしながら、こいつ、日本語普通に喋ってるような気がする。つづーことは、やっぱりここは日本？ でもコイツ、明らかに日本人じゃないしなあ。

才人は再び訳が分からなくなった。

「一体どこにある国？」

「それより、ここは一体どこなんだ？」

「どういう意味？」

「いや、そのまんまだよ。いきなり、連れてこられたんだ。分かるわけないだろ。」

「ここは、トリスタニアの魔法学院だ。」

「トリスタニアって国の名前か？」

「知らないのか？」

「いいや、知らない。」

「ふうん、遠いところから飛ばされてきたのかもな。」

” 本当に” 知らない。トリスタニアなんて国聞いたことがない。新興国か何かだろうか。それとも俺が見たことも聞いたこともない、知らない国なんだろうか。地球の国の数なんて正確にはわからないし、全て覚えているわけがない。覚えていないけど、この国の名前の” 響き” は、なんだか” らしくない”。

才人は無自覚に地球上に存在している国の名前ではない気がした。それよりも気になったワードが今まで何回か出現している。

「魔法ってなんだ？ 何かの比喩か？」

「魔法は魔法だ。それ以外の何ものでもない。」

まだ少し眼が赤いこの子があまりにも当たり前のように言うので、才人は宗教集団か何かに攫われたのではないかと、真剣に不安になった。

「って、そうだ俺のパソコン！」

「それはいつたいなんなんだ？」

「ええと、こんくらいの大きさの、箱みたいな奴だよ。」

本気でパソコンが分からないようだったので、同じ問答を繰り返さないためにも、才人はへこたれずにこの子に付き合うことにした。

「広場でお前が持ってた奴のことか？」

「そう、それ！ いや、まだわかんないけど！」

「それなら広場にまだあるんじゃないか。」

「その広場ってどこだ！」

「外の、魔法学院の前にある広場だ。」

「そこに連れてってくれ！」

「なんで僕がそんなことをしなくちゃいけないんだ。」

「いいから頼む！ パソコンのことも教えてやるから！」

いやそんな顔をしていたルイズだったが、渋々ながらも了承する。少しだけ、才人が連呼するパソコンとやらが何なのか気になっていた。

共に部屋を出て、ルイズは学生服のポケットから重厚で華美な装飾が施された鍵を取り出して施錠する。

「ところで、その腰に差してある剣っぱいは本物か？」

「当たり前だ。切りたいのか？」

「いーえ、滅相もございません。」

そついう、ちょっと格好つきたいお年頃なのかもしれない。そう思った才人は泣き出したさっきの様子を思い出し、深くは突っ込まないでおく。ルイズの見た目から自分より年下と判断していた。

「お前の名前はなんなんだ？」

「ルイ・アレクサンドル・デュ・ダータリチエ」

「え、えつと、ルイが名前だよな。」

「当たり前だろう。」

普段、外国人の名前なんてテレビぐらいでしか見たり聞いたりしない才人は、長ったらしいルイの名前に面食らう。

「なあ、ルイ。ここは魔法学院じゃないのか？」

「違う、ここは男子寮だ。そして、さっきの部屋は僕に割り振られた部屋だ。」

才人がなんでもかんでも質問してくるため、ルイズはいちいち彼の無知に反応するのに疲れたので、素直に答えてやることにしていた。

二人揃って廊下を歩き出す。

「へえー、男子寮。ずいぶん大きい量なんだなあ、ってうええええええ男子寮?!」

「大声を出すな! 響くだろ!」

ルイズの部屋と違ってここにはなんの処置もされていないので、当然大きな声を出せば音が反響する。

「なに、お前、男だったの!?!」

「わ、悪いか。」

階段にさしかかった辺りで才人は驚愕する。

「ほ、ほんとうに? こんなに小さくて、こんなに可愛いのに!?!」

「なんだと!?! あっ、いや、背が小さくて悪いか!」

「ご、ごめん。華奢だし、すっげえきれいだったから、女だと思ってたよ。」

「ふ、ふん。」

「そっだよな、どう見たって男だよな。女だったらもうちょっと胸があるし。」

「...。」

殺意の波動がルイズを支配したものの、ここで怒っては少し不自然だったので、ふうふうと息を吐いて怒りをなんとか納める。

そして名状しがたい負の雰囲気を感じ取った才人は、少しびくびくしながら、ルイズは、羞恥に肩を震わせながら階段を降りていく。時は夕刻に差し掛かっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3344ba/>

烈風の騎士姫の娘

2012年1月8日18時22分発行